

## 縦と横に広がる絆

## 横田 順子

近年重宝がられる「癒し」という言葉を考えさせられた。必ずしもほのぼのと優しい作風ばかりが癒やしを与えてくれるわけではない。厳しい現実を突き詰めた作品の苛烈さに救われることが多かった。

二〇一〇年と同様、多様な文化を反映した作品が目についた。チュニジアの作家エムナ・ベルハージ・ヤヒヤの『見えない流れ』（青柳悦子訳 採流社）とベンガル（現在のバングラデシュとインド北東部）の作家ブーダデイヴァ・ボースの『駅舎にて』（飛田野裕子訳 あすなる書房）は、時代や社会の制約の中でひたむきに幸福や愛を探し求める人々の心の軌跡を描く。雑然とした街角の日常性と悠久の時間の流れをとらえる普遍性を併せ持ち、それぞれの国や地域

の風俗を楽しみながらどこか懐かしい親近感を得られる作品だ。またフランスのゲザヴィエール・ローラン・プティは『走れ！マスマラ』（浜辺貴絵訳 P.H.P.研究所）で、ナイロビマラソンで優勝したチラポンをモデルに、走ることで病気の娘を救おうとする母親の愛情を謳いあげた。

多民族国家としてのアメリカの姿を模索した作品もある。クリスティーナ・ガルシア作『ユミとソールの10か月』（小田原智美訳 作品社）では、日本人とキューバ人の血を引く少女ユミが戦争や恐慌を経た祖父の人生を知ること、新しい生活へ踏み出す勇気を得る。いっぽう、アフリカ難民を受け入れた一家庭を舞台としたキャロライン・B・クニーの『闇のダイヤモンド』（武富博子訳 評論社）は、西アフリカ地域で内戦や貧富の差の原因となる「血のダイヤモンド」の問題を、ミステリー仕立てのサスペンスとともに提起した。キャシー・アッペルトの『千年の森をこえて』（片岡しのぶ訳 あすなる書房）は動物と人間、樹齢千年のテードマツの物語が混在するファンタジーだが、その骨格にアメリカ先住民の死生観がある。

多様な文化は歴史から生まれ、また歴史は文化に還元する。実話を基に歴史を新たな角度から見直した作品に白眉があった。ひとつは、ヨアンナ・ルドニャンスカ作『ブリギーダの猫』（田村和子訳 未知谷）。第二次世界大戦中ユダヤ人を救い、ヤド・バシエム（イスラエルのホロコースト